

第3回山形県文化推進委員会における主な意見等

日時：平成31年1月30日（水）13:30～15:00

場所：山形県庁1001会議室

協議テーマ：山形県文化推進基本計画(仮称)案について

〈各委員の主な意見〉

- やまがた障がい者芸術活動推進センター事業の巡回展として、1月に鶴岡市の国の有形文化財に指定されている建物で、主に庄内地方の障がい者の作品展を行った。400人近くの方に足を運んでいただき、関係者として喜んでいる。一方、残念なことに建物がかなり傷んでおり、作品を展示する環境としてはふさわしくないのではないのかとの御意見もいただいた。
- 前回巡回展を行った新庄市の「エコロジーガーデン」など、各圏域に魅力的な建物が多くあるという印象がある。ギャラリーや美術館での発信もあるが、文化財を活用しながら、障がい者の作品をより身近に感じていただくとともに、文化財が有効活用されるような取組をセンターの事業の中で行っていきたいと思っている。文化財を保全するための資金確保は厳しいと思うが、建物に限らず、県内の魅力的な文化財の保全を県としてもバックアップしてほしいと思う。
- 大学主催の芸術祭は、学生募集のプロモーションではなく、地域振興として行っている。学内では、県や市をパートナーとして行っていけないかという声がある。自分たちで実験的に行うのも良いが、行政と一緒に課題解決していききたいという気持ちも強い。ぜひ具体的連携につなげていききたいと思っている。
- 去年、学内に新しいギャラリーが4つできた。学内での利用はもちろん、地域の開かれた美術館としての役割も果たしていく必要があるのでは、という声も上がっている。大学の中の施設の活用なども行政と一緒に行っていけたらと思う。
- 計画では子どもたちに関する記載が多く、この委員会の中でも委員の皆さんから次世代育成について多く発言されている。今後、学力の定義が大きく変わろうとしている。子どもたちの能力を測る指標は、偏差値からコミュニケーションや共同性、多文化理解、福祉、世代間の交流へと変わっていく。文部科学省が旗振りをしているので、大学も変わるだろう。
- 能力を身に付けるには、塾に通うことではなく、例えば地域のスポーツ、音楽・演劇・美術などの文化体験などが必要。幼少期に経験したことが、大人になってからの教養の差になる。スポーツは地域と様々な面で連携しているが、文化は少ない。大学や自治体の単発のイベントはあるが、継続的に参加できる仕組みが不足している。文化もあってもいいじゃないかと

- ということではなく、重要な教育的視点であるという認識で進めていく必要がある。
- 文化を国や県が用意してきた時代とは違い、文化を活用し自ら経済や地域の活性化を進めていかなければならない時代に入ってきている。具体的にどうしていくのか、関係機関と連携して取り組んでいかなければならないと思う。教育と文化に関する施策、活性化に文化をつなげる施策が今回の重要なポイント。責任感を持って進めていかなければと思う。
 - 前回提案した、小さい頃から教育、文化に親しむという人づくりの部分を含んでいただいた。
 - 県民が県内の文化にどれだけ関心があるのかというデータをみると、非常に関心が低い、親しみがなく、接点が非常に少ないという結果が出ている。例えば山口県萩市では、住民が積極的に家の前の通路を掃除し、観光客にあいさつし、萩の魅力を語っている。小学生も観光客とあいさつし、地域の自慢をしたりする。県民の地域への誇りと関心が行動となって現れ、魅力となり、活性化につながっていく。
 - 本県では、キラコンテンツのひとつである精神文化を語れる県民がどれくらいいるのか。語れる県民を育てる仕組みが必要。例えば伊勢市では、お祭りでは学校・会社は休みにしてイベントに取り組むという市民性がある。イタリアでは、こちらがきかなくても土地・地域の自慢をする。このようなことが魅力の伝承・継承につながっていく。
 - 企業としての取組も必要。経営者が積極的に旗振りをして商品に地域のものを取り入れたり、生活の中に地域のものを取り入れることを啓蒙したりすることも必要。
 - 海外への発信も重要。県民が気づきにくい魅力を海外の人が見つけることがたくさんある。数年前、ミラノ大学教授の熱意で土門拳写真展がローマで開催された。このようなことにも着目して、実現可能な方向性にもっていけるような具体的な取組が必要。これらがプロモーションやPRという文言に盛り込まれているのだと思う。
 - 県民が何か気づいた時に身近なところで相談できる文化の窓口をつくるなど、県民・市民・町民・村民と直結する仕掛けができれば、新しい文化の道筋が開けると思う。
 - 地域の人、子ども、大学生、若者、外国人、情報発信というフレーズがみられ、退屈になりがちな文化という部分での活動に変化があっただけだと感じた。
 - 進行管理の指標に施設の入場者数とあるが、施設側からすれば、単に県に数字を報告するだけになってしまわないかと懸念される。地域の人、子ども、大学生、若者、外国人という記載があるので、そこを活かして、伝統文化に関わっている地域の人々の生の声をヒアリングしてほしいと思った。後継者で苦労されている人が多いので、その状況を把握することも大切だと思う。

- 伝統文化のイベントに足を運ぶ人の年代やどこからきたのかなども何らかの形で測ることができたらと思う。
- 文化活動団体がどのように活動を発信しているのかを把握し、様々な発信手段がある中で、何を使えば効果があるのか考えることも必要。文化関係の様々なサイトがあるが、どのような人がどのページを見ているのか、多言語ウェブサイトへのアクセス数なども把握できればと思う。施設の入場者数を測るだけでなく、もう少し詳しく調べる必要があると思う。

- 全体的には各委員のご意見、要望が反映されてうまくまとまっているという印象がある。
- 文化をめぐる社会情勢（第2章）中の「普遍的価値を求める動き」については、一方ではSNSなどの情報化時代がもっている危うい一面を克服しようとする動きでもあるのではないか。他を思いやる創造性、共に喜び合う情感、異なる意見への寛容性などは、文化活動や文化交流を通して育まれる部分がある。経済活動、社会活動の根本にあるものは文化・芸術的価値。ここでいう人類が共通する普遍的価値へとつながっていく、そういうものを再認識しようという動きが大きくなっていると捉えている。世の中の現状認識として、グローバル化、IT社会、SNS等があるが、もう一方の危惧される部分に対して、芸術文化の果たす役割のようなものも、世界認識、絶対認識として、山形県として現状として捉える。だから条例、計画を策定するという理論でもっていった方がいいのではないかと思う。

- 充実した計画ができたと思う。先細りの不安があったが、もうひとふんばりかなと思いはじめているところ。それぞれの地域でもそう感じる人が多くいると思う。このようなきめ細かな行政がなされれば素晴らしいと思うが、各市町村との連携が前提なので、困難なこともあると思う。計画だけで終わることのないよう、実行、評価をどうするのかも併せて考えていくことが必要。
- 山形県総合文化芸術館はこれから様々な行事をしていくと思うが、地域の催しと競合するようなことは行わないでいただきたいと思う。若い人が東京に行かなくても一流のものに触れて、聴いて、観ることができるようになってきたのかと思う。山形市中心になるのは否めないと思うが、ぜひ県内全ての県民、若い人に恩恵が届くように色々な工夫をして県内の文化活動をリードしていただけるような計画をたててほしい。

- 昭和37年にできた県民会館が役割を終え、今新しく山形県総合文化芸術館ができるが、特に、その運営に関心を持っている。舞台を使って表現しようとする活動のほとんどの人が、素晴らしい会館だから使用料が高くなるのではないかという懸念を持っている。良いものが

できても、県民が使いやすいのか、使いきれぬ状況にあるのか。いかに県民が芸術文化に興味をもっていないのかというアンケート結果も出ている中で、立派な2,001席のホールをつくっても、高嶺の花にならないように、地元の人が会館を活用し芸術性を高めていくような場になるようにしていただきたい。

- 今後、どう発信していくのかということも重要だが、現状がどうなっているのかを調べてみた。地域創造に「地域文化資産ポータル」がある。市町村が伝統芸能や年中行事を登録して発信するものだが、山形県が東北で一番少ない。市町村の関心が低いと感じた。伝統芸能など非常にたくさんある中で、登録が非常に少ないのが残念。
- 現在は、8割がスマホで見る時代になっている。計画に記載されている「未来に伝える山形の宝」ポータルサイトをみると、表示が崩れていたため、今後改善いただきたい。現状の改善を行ったあとに多言語化に取り組むことが重要。
- 文化庁に、東京オリパラに向けて日本の魅力を発信するためのサイトがあるが、山形県を検索したところ、雪フェスティバルや最新のイベントが出てくるが、1つもイメージが貼り付けられていなかった。せっかくのイベントなので、ひと目でビジュアルでわかるように、少なくとも県主催のイベントは画像を貼り付け、しっかりと表示し、ビジュアル的に行ってみたいと思われるような発信の仕方が必要だと思う。
- 食文化に関心があり、毎年ヨーロッパで芋煮会をしている。ドイツ11回、オランダ4回、パリ2回、ベルギー1回、トータルで11年間やっている。オランダでも芋煮の人気があり、ジャパンフェスティバルの中で試しにアムステルダムで玉こんにゃくと芋煮を出したところ2時間で完売した。そのくらい外国でもおいしいと食べてもらえる。エッフェル塔の真下で開催した時は60人ほど来てくれた。山形から持っていった芋のやわらかさに驚いていた。せっかくミラノ博で情報発信してきたので、継続してヨーロッパに食文化を発信するなど、食文化にももう少し意識をもっていたらと思う。
- 第5章の推進体制の中で、山形県生涯学習文化財団に期待する役割などが記載されており、改めて当財団が文化振興の一端を担うべき責任の重さを実感している。市町村、県内文化団体、大学等とこれまで以上に連携しながら事業を実施していきたいと考えており、県からは事業実施にあたっての有益な情報提供、指導とともに、多くの文化団体は限られた財源の中でとても苦労しながら頑張っている活動しているので、財団とともに、県からも様々な支援を引き続きお願いしたい。
- 文化条例ができ、基本計画ができることは大変結構なこと。今後、具体的に実践していくう

えで、様々問題がでてくると思うが、その都度検討しながら前向きに向き合ってもらいたい。山寺と紅花の文化遺産については、当初計画から随分広がりそうだとの相談を受けている。それでいいと思う。文化も固定するわけではなく、進化させなければならないので、そういう精神でやっていただきたいと思う。